

平成27年度

病害虫発生予察情報

第6号

7月予報

北海道病害虫防除所 平成27年6月30日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

季節予報（付記）によれば、7月の天気は、北海道日本海側・オホーツク海側では、数日の周期で変わり、北海道太平洋側では、平年と同様に曇りの日が多い見込みと予報されています。気温が平年より低い確率と降水量が平年並の確率がそれぞれ40%で、気温、降水量ともに平年並と予報されています。

このような予報から、多めの発生が予想される病害虫は、水稻のいもち病、秋まき小麦の赤かび病、春まき小麦の赤かび病、てんさいおよびあぶらな科野菜のヨトウガ、たまねぎの白斑葉枯病、ネギアザミウマ、りんごの黒星病、モモシクイガがあげられます。

7月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想	注意事項および防除対策
水稻	いもち病	発生期はやや早 発生量はやや多	取り置き苗は放置せず処分する。過剰な分追肥をしない。BLASTAMを参考にモニタリングを行い、早期発見に努める。穂いもちに対する出穂期散布は必ず実施する。耐性菌発生リスクを高めないために、薬剤の選択に注意する。
ばれいしょ	疫病	発生期はやや早 発生量は平年並	初発後は急激にまん延するので、散布遅れにならないよう注意する。予察情報や気象情報を活用し、適切な初期防除を実施する。
てんさい	褐斑病	発生期は平年並 発生量は平年並	薬剤に対する低感受性菌や耐性菌の発生が認められているため、薬剤の選択には特に注意する。散布遅れに注意する。
たまねぎ	ネギアザミウマ	既発生（やや早） 発生量はやや多	ピレスロイド剤抵抗性個体が道内野菜栽培地帯のほぼ全域で確認されているため、防除にあたって薬剤選択に注意する。
たまねぎ	ネギハモグリバエ	—*	りん茎に幼虫が食入するのは7月以降と考えられる。発生地帯においては、成虫食痕の確認を励行し早期防除に努める。

*：平年値がなく、発生予想の対象外

A. 水稻

いもち病（葉いもち） 発生期：やや早 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いたり、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。発病適温は20~25℃であり、初発危険期は平均気温が20℃、最低気温が16℃に達した頃とされている。特に、保菌苗を本田に移植した場合は発生期が早まる可能性が高い。
- (2) 予察田（品種：「きらら397」）に設置した取り置き苗（接種）での初発期は、岩見沢市では6月22日（平年：7月1日）と平年より早く、北斗市では6月22日（平年：6月25日）と平年よりやや早く、比布町では6月18日（平年：6月18日）と平年並だった。
- (3) 6月中旬から下旬にかけて平均気温が20℃前後で雨の日が続き、葉いもち感染好適指数「BLASTAM」で感染好適日および準好適日が全道各地で散見された。
- (4) 水稻の生育は平年並である。
- (5) 主要作付品種のほとんどは葉いもち抵抗性が“弱”から“やや弱”である。
- (6) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (7) 以上のことから、葉いもちの発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 取り置き苗を本田や畦畔に放置せず処分する。また、多肥は本病の発生を助長するので窒素質肥料の過剰な分追肥をさける。
- (2) 気象情報や発生予察情報を参考にして、葉いもちの早期発見に努める。(下記コラム参照)
- (3) 水面施用剤の使用を予定している場合は各薬剤の施用適期を逃さないよう注意する。
- (4) 葉いもちの病斑を発見した場合や近隣で発生が確認された場合には直ちに防除を開始し、1週間間隔で出穂期まで防除する。
- (5) 穂いもちに対する出穂期の散布は必ず実施する(基幹防除)。なお、葉いもちの発生が多く、出穂期間が長引く場合には、1週間程度の散布間隔で穂が完全に揃うまで散布を継続する。
- (6) MBI-D剤によるいもち病防除効果の低下が懸念される水田では同剤の使用を避ける。なお、MBI-D剤を使用する水田では、防除ガイドに準拠して使用する。
- (7) QoI剤は西日本を中心に東北地方の一部でも耐性菌が確認されており、道内での耐性菌出現を避けるため、使用に際しては以下の点を順守する：①使用は年1回とする、②体系防除を行う場合は作用性の異なる薬剤と組み合わせる、③採種ほどは使用しない、④規定量の処理を行う。

葉いもち早期発見のポイント

・モニタリング時期：幼穂形成期5日後ころ

BLASTAM(ブラスタム)の感染好適日から約1週間後は要注意。
種子消毒が未実施で育苗箱施用剤、水面施用剤を使用していない場合は、
気象情報やBLASTAMの情報を参考にして早期に防除を開始する。

・モニタリング方法：水田1筆につきそれぞれ離れた4カ所で1畦10mの下葉を主体に見歩く →ひとつでも病斑があれば薬剤散布を開始する

(BLASTAMは北海道病害虫防除所のホームページで見ることができます。)

ニカメイガ 発生期：並 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) これまでの気象経過から、発生期は平年並と予想される。
- (2) 一般田における前年の発生量から越冬密度はやや低いと推測され、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫発生最盛期は通常7月中旬から8月中旬頃であり、多発田では成虫発生最盛期およびその7～10日後に茎葉散布を実施する。

ウンカ類 発生期(第2回)：やや早 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカ第1回成虫は、畦畔すくい取りでは長沼町、比布町で平年より多く、北斗市では平年並だった。発生期は平年よりやや早かった。
- (2) 予察田におけるすくい取りでは、いずれの地点においても発生が認められていない。
- (3) 予察灯調査によるヒメトビウンカ第1回成虫の誘殺は、長沼町(平年初発：6月24日)、比布町(同：6月6日)、北斗市(同：6月22日)のいずれにおいても確認されていない。
- (4) 予察灯調査によるセジロウンカの誘殺は、いずれの地点でも認められていない。
- (5) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、第2回成虫の発生期は平年よりやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 多発による被害が予想される水田では、防除ガイドに準拠し、カメムシとの同時防除を実施する。
- (2) 吸汁害が発生するのは、7月下旬以降の第2回成虫発生時に株当たり寄生頭数が50頭(20回すくい取り換算頭数で成虫1,800頭)以上の激発となった場合である。

イネドロオイムシ 発生期：既発(並) 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察田における成虫の初発期は比布町および北斗市で平年並だった。産卵初発期は北斗市でやや早く、比布町で平年並だった。

- (2) 予察田における卵塊および幼虫密度は、比布町、北斗市ともに平年よりやや低い。
- (3) 6月3半旬の巡回調査によると、要防除水準を超えた地点は認められなかった。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 老齢幼虫に対する防除効果は劣るので、防除要否は早めに判断する。
- (2) 薬剤散布は防除ガイドに準拠して実施する。フィプロニル剤やイミダクロプリド剤に対する抵抗性個体群が認められているため、前年度までの防除効果を参考に薬剤を選択する。

アカヒゲホソミドリカスミカメ（第2回） 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は第2回成虫が7月に発生し、水田に侵入する。成虫と幼虫がともに稲を加害する。7月の気象が高温少雨に経過した場合は第2回成虫の発生量が多くなる。
- (2) 予察灯による第1回成虫の誘殺開始日は、長沼町で6月12日(平年：6月13日)と平年並である。比布町(平年：6月16日)、北斗市(平年：6月21日)では誘殺を認めていない。
- (3) 水田畦畔におけるすくい取りによる捕獲虫数は、長沼町で平年並である。比布町、北斗市では捕獲が認められていない。
- (4) 秋まき小麦すくい取りによる捕獲成虫数は、長沼町で平年より多く、比布町では平年並である。長沼町では6月1半旬、比布町では6月2半旬から捕獲が認められている。
- (5) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、第2回成虫の発生期は平年並で、発生量も平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 第1回成虫の発生期(6月下旬から7月上旬)に、本種が増殖する水田周辺のイネ科雑草を刈り取る。
- (2) 茎葉散布は出穂期とその7日後の2回を基幹防除として実施する。
- (3) ジノテフラン液剤またはエチプロール水和剤Fを使用する場合、基幹防除を出穂期7～10日後の1回散布に省略できる。なお、追加散布については、従来通りの基準で行う。
- (4) 水面施用剤は、出穂期から出穂7日後に施用すると出穂2週間後まで残効が認められ、出穂期およびその7日後の茎葉散布2回と同等の防除効果が期待できる。

フタオビコヤガ（第2回） 発生期：並 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察田における第1回幼虫の発生および被害は、比布町で平年よりも少ない。長沼町、北斗市では発生が認められていない。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、第2回幼虫の発生期は平年並で、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 7月下旬に10株について幼虫被害を調査し、被害株率が100%に達し、かつ被害葉率が65%を越えていたら防除を実施する。

農薬による蜜蜂への被害に注意しましょう！

- 水稲の開花期である7～9月は、多くの養蜂家が道内各地に移動してきており、その中で水田の周辺に蜂場を設置して養蜂が行われている場合があります。
 国の調査結果では、蜜蜂被害は水稲の開花期に多く、カメムシ防除に使用する殺虫剤を直接浴びたことが、原因の可能性があると考えられています。
 このため、これから水稲のカメムシ防除の時期となってきますので、次の点に留意して適切な防除対策を進めてください。

- ① 蜜蜂は水稲開花期に周辺の水田に飛来しており、その際、カメムシ防除のための殺虫剤の暴露により被害が生じる可能性があります。
- ② 関係機関や農業団体等は、蜂場の設置場所及びその周辺の水田の農薬散布計画等の情報を相互に共有し、得た情報を養蜂家、周辺の水稲農家に伝え、注意喚起しましょう。
- ③ 養蜂家は、蜜蜂がカメムシ防除の殺虫剤に暴露する確率が高い場所には、できるだけ巣箱の設置を避けるか、水稲の開花期に巣箱を退避させましょう。
- ④ 水稲農家においても、養蜂家と協力して、蜜蜂の活動が盛んな時間帯の農薬散布を避けたり、蜜蜂が暴露しにくい形態の農薬(粒剤等)を使用するなど、地域の実態に合わせて取り組んでください。

B. 秋まき小麦

赤かび病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤かび病は出穂期から開花期頃に雨天が続くと多くなり、その後の降雨により病勢が進展する。
- (2) 6月は上から中旬頃に降雨が続き、この降雨は多くの地域で秋まき小麦の開花期と重なったと考えられる。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布間隔は7日、防除回数は合計2回を基本とし、開花期間が長引いたり、ばらつく場合には追加防除も検討する。
- (2) ミクロドキウム・ニバーレでは、クレソキシムメチル剤およびチオファネートメチル剤に対する耐性菌が広範囲で確認されていることから、本菌による赤かび病の多発が懸念される地域では使用しない。
- (3) 刈り遅れのないように注意し、刈取後収穫物を速やかに乾燥する。赤かび粒を除去するため、粒厚選別および比重選別を実施する。

アブラムシ類 発生期：既発（やや早） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおけるムギヒゲナガアブラムシの初発期は、長沼町で6月4半旬（平年：6月4半旬）と平年並で、訓子府町では6月3半旬（平年6月5半旬）と平年より早かった。ムギクビレアブラムシの初発期は訓子府町では6月2半旬（平年：6月5半旬）と平年より早かった。長沼町（平年初発：6月6半旬）では発生が認められていない。
- (2) 予察ほにおけるアブラムシ類の発生量は、長沼町で平年並で、訓子府町で平年よりやや多い。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 1穂当たりの寄生密度が7～11頭に達すると収量に影響する。穂への寄生密度は出穂の10～20日後に高まるので、この時期の発生状況に注意する。ただし、寄生の認められる穂が50%を越えない場合には、このような密度に達しないので薬剤防除は不要である。

C. 春まき小麦

赤かび病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤かび病は出穂期から開花期頃に雨天が続くと多くなり、その後の降雨により病勢が進展する。
- (2) 6月は中旬から下旬に降雨があり、多くの地域で春まき小麦の開花期と重なった。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布は開花始から行い、散布間隔は7日、防除回数は合計3回（抵抗性“やや弱”の「ハルユタカ」では4回）を基本とし、開花期間が長引いたり、ばらつく場合には追加防除も検討する。
- (2) 刈り遅れのないように注意し、刈取後収穫物を速やかに乾燥する。赤かび粒を除去するため、粒厚選別および比重選別を実施する。

D. 豆類

べと病（大豆） 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) べと病は第一次伝染源が種子であることが多く、多雨や多湿時、密植や過繁茂で風通しが悪いときに多発する。
- (2) 一般ほでは発生が見られるものの、近年は多発していない。
- (3) 大豆の生育状況は平年並である。
- (4) 以上のことから、発生期ならびに発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 本病による被害が出やすい黒大豆と抵抗性が“弱”の黄大豆および青大豆品種では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。それ以外の黄大豆ならびに青大豆品種では防除の必要はない。
- (2) 本病の要防除水準は、開花始の上位葉の病斑面積率 2.5%（1 小葉当たりの病斑個数約 30 個）である。

菌核病	発生期：並	発生量：並
------------	--------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 菌核病は花卉感染が主体であり、開花期以降の日照が少なく多湿な場合に多発する。また、感染源となる子のう盤の形成は、茎葉によって地表面がうっぺいされるほど良好となる。
- (2) 豆類の生育状況は、大豆、小豆および菜豆のいずれも平年並である。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期、発生量とも平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 開花時期に注意し、薬剤散布にあたっては、大豆では開花始から 10～15 日後、小豆では 7～10 日後、菜豆では 5～7 日後に 1 回目の散布を行い、その後必要に応じて、10 日間隔で計 2～3 回散布する。

灰色かび病	発生期：並	発生量：並
--------------	--------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 灰色かび病は開花期以降の天候が低温で多湿な場合に多発する。また、過繁茂状態は本病の進展を助長する。
- (2) 豆類の生育状況は、大豆、小豆および菜豆のいずれも平年並である。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期、発生量とも平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布時期、散布間隔、散布回数は菌核病に準ずる。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
- (3) 菜豆と小豆では、フルアジナム剤とジカルボキシイミド系剤に対する耐性菌が認められているので、防除ガイドに準拠して適切な薬剤防除を実施する。

茎疫病（大豆・小豆）	発生量：並
-------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 茎疫病は土壌が湿潤な条件で発生し、比較的気温が高い場合に多発する。なお、7月中旬以前に発病すると被害が大きくなる。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 転換畑や排水性の不良なほ場では排水対策を講じる。また、培土処理は本病の発病を軽減できる。
- (2) 開花期前半までの発病を抑えることを目安にし、発病前から予防的に薬剤散布する。発病後に薬剤散布しても効果がないので、気象情報により大雨が予想された場合はその前に散布する。

アズキノメイガ（小豆・菜豆）	発生量：やや少
-----------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 前年の発生量は平年と比較してやや少なかったことから、越冬密度は平年よりやや低いと推測される。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、産卵盛期の7月下旬から8月中旬に薬剤散布を実施する。

食葉性鱗翅目幼虫（大豆・小豆）	発生期：やや遅	発生量：並
------------------------	----------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 大豆では開花期から莢伸長期に葉を食害されると最も収量に影響する。この時期の食害葉面積率が 20%に達すると約 5%の減収となる。

- (2) 長沼町、訓子府町の予察ほにおける食害は、大豆、小豆ともに認められていない。
- (3) ヨトウガの発生量は平年よりやや多い（てんさいのヨトウガの項を参照）。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 主要な加害種は、ツメクサガ、モンキチョウ、キタバコガ、ヨトウガである。なお、大豆では鱗翅目幼虫の密度が開花前に大豆1個体当たり1頭、開花期頃に2頭、莢伸長期以降に3頭を越えなければ、防除の必要はない。

マメアブラムシ（小豆）	発生量：並
-------------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける発生量は、芽室町および訓子府町で平年並であり、両地点ともに寄生株率は5%未満である。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 寄生株が目立つ場合には、防除ガイドに準拠して茎葉散布を実施する。ただし、散布ムラによる虫の残存があったり散布後に高温少雨が続きと短期間で密度が回復する場合があるので、防除後の経過に注意する。

E. ばれいしよ

疫病	発生期：やや早	発生量：並
----	---------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は10℃を超えると病原菌の活動が始まり、18～20℃が最適温度とされている。塊茎中で越冬した菌糸が萌芽した地際部の茎に病斑を形成して伝染源となる。曇雨天が続くとまん延し、高温乾燥条件で停滞する。
- (2) ばれいしよの生育は、平年より早く推移している。
- (3) 初発生期予測システム「FLABS」での「基準月日」（下記コラム参照）に25地点中9地点（6月24日現在）が達している。
- (4) 予察ほでは、長沼町、北斗市、芽室町および訓子府町のいずれの地点においても発生が認められていない。
- (5) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから発生期は平年よりやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発生期予測システム「FLABS」による予察情報を利用して適切な初期防除に努める。さらに降雨によって防除適期を失わないよう気象情報にも注意し、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) 初発後は急激に進展することも懸念されるため、薬剤の散布開始が遅れないよう留意する。
- (3) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。
- (4) ダブルインターバル（14日間隔）散布を行う場合は、初発前から散布を開始し、薬剤は14日間隔での指導参考薬剤を用いる。

「FLABS」運用中

疫病的初発生期予測システム「FLABS」（フラブス）の予測結果を病害虫防除所のホームページで随時更新しています。防除開始の参考にお役立て下さい。

「基準月日」：気象データと萌芽日から「感染好適指数」を計算し、その累積値が「21」に達した日。「初発予測日」は「基準月日」のおよそ2週間後です。

軟腐病	発生量：並
-----	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨な条件で発生が多く、多窒素栽培により茎葉が過繁茂したり倒伏すると多発する。
- (2) ばれいしよの生育は、平年より早く推移している。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。

(4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。特に大雨、強風および降雹によって倒伏や損傷のあったほ場では本病が多発しやすいので注意する。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。特にオキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

アブラムシ類 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのばれいしよにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシの初発期は、長沼町で早く、訓子府町で平年並だった。芽室町（平年：6月6半旬）では発生を認めていない。
- (2) ワタアブラムシの初発期は長沼町で6月4半旬（平年：6月5半旬）で平年よりやや早く、訓子府町では6月4半旬（平年：7月1半旬）と、平年より早かった。芽室町では発生を認めていない。モモアカアブラムシはいずれの地点においても発生を認めていない。
- (3) 予察ほのばれいしよにおいて、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシともに発生量は平年並に止まっている。
- (4) 6月3半旬の巡回調査において、ほとんどの地点で寄生は認められておらず、20複葉あたり寄生虫数は最大でも5頭である。
- (5) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ジャガイモシストセンチュウの植物検診を励行しよう

ジャガイモシストセンチュウのまん延を防止する上で、植物防疫法に基づく防疫検査が義務づけられている種ばれいしよ以外の一般ばれいしよにおいても検診を実施し、シストセンチュウを早期に発見することが重要です。7月は「植物検診」に最も適しているので、次の事項を参考に、一般ばれいしよの検診に取り組みましょう。

- 対象地域 ジャガイモシストセンチュウの発生が確認されていない市町村又は地域の一般ばれいしよほ場
- 実施体制 市町村、農業協同組合などで構成する協議会が主体となり、道、総合振興局または振興局、北海道病害虫防除所と連携し、「北海道ジャガイモシストセンチュウ防止基本方針」に基づき実施。
- 実施時期 根にシストが着生する時期（道央・道南地域：7月上旬から中旬、道東・道北地域：7月中から下旬）。時期が遅れるとシストが根から離脱し、発見しづらくなるので注意する。
- 留意事項 検診の結果、シストを確認したり疑わしいものを発見した場合は、直ちに、北海道病害虫防除所へ連絡し、指示を受けるものとする。

詳しくは、北海道農政部技術普及課、北海道病害虫防除所までお問い合わせください。

F. てんさい

褐斑病 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病は高温多湿な条件で多発する。
- (2) てんさいの生育は、平年より早く推移している。
- (3) 予察ほでの発生は長沼町、芽室町および訓子府町（平年初発：7月中旬）のいずれにおいても確認されていない。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 発病が進むと防除効果が得られにくいため、散布遅れにならないよう注意する。
- (2) DMI 剤低感受性菌およびQoI 剤耐性菌（コラム参照）が道内で確認されているため、これらの系統の薬剤の使用にあたっては特に注意し、耐性菌や低感受性菌の新たな発生を抑えるため、作用機作の異なる薬剤を組み合わせた体系防除を実施する。
- (3) 本病に特に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。

てんさいの褐斑病でQoI 剤耐性菌が発見されました

平成26年に北海道内のてんさい栽培ほ場でQoI 剤耐性の褐斑病菌が発見されました。耐性菌の発生しているほ場ではQoI 剤による効果が得られないため、注意が必要です。防除対策としては耐性菌の発生確認状況に応じて以下のように対応してください。

- (1) 耐性菌が広範囲かつ高率に確認された十勝地方では、褐斑病に対する防除薬剤として、QoI 剤（アゾキシストロビン、クレソキシムメチル、トリフロキシストロビン）は使用しない。
なお、根腐病および葉腐病に対するQoI 剤の使用回数は、登録の範囲内とする。
- (2) 耐性菌の発生状況がまだ十分に調査されていないその他の地域においては、次の注意事項を遵守する。
 - ① QoI 剤の使用は、褐斑病菌の耐性菌発生リスクを最小限とするため、根腐病および葉腐病の防除も含め年1回までにとどめる。
 - ② QoI 剤を褐斑病の防除に使用する場合は、8月中旬以降の褐斑病急増期での使用は避け、できるだけ発生初期の段階で使用する。また、QoI 剤使用前後の散布間隔が開きすぎないように注意する。
 - ③ QoI 剤による褐斑病の防除効果が得られない場合は、すみやかに他系統剤による防除を行い、次年度以降は褐斑病に対するQoI 剤の使用を避ける。

なお、詳細な情報は、「平成26年度病害虫発生予察情報第21号（特殊報第1号）」でご覧いただけます。

ヨトウガ（第1回） 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察灯による第1回成虫の初誘殺は、北斗市で5月30日（平年：6月12日）と平年より早く、長沼町で6月7日（平年：6月9日）、比布町で6月7日（平年：6月8日）、芽室町で6月16日（平年：6月16日）でともに平年並だった。訓子府町（平年：6月8日）、滝川市（平年：6月13日）では誘殺が認められていない。
- (2) 予察ほにおける産卵初発は、長沼町では6月2半旬（平年：6月2半旬）と平年並で、芽室町では6月1半旬（平年：6月3半旬）と平年より早く、訓子府町で6月4半旬（平年：6月5半旬）と平年よりやや早かった。
- (3) 予察ほにおける産卵量は、長沼町で平年よりやや少なく、芽室町では平年よりやや多く、訓子府町では平年並である。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達した時を目安に薬剤散布を実施すると、幼虫を効率的に防除でき、散布回数を1回にとどめることができる。薬剤の効果は幼虫の齢が進むにつれて低下するので、散布適期を逸しないよう注意する。

G. たまねぎ

白斑葉枯病 発生期：既発（並） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 白斑葉枯病はまとまった降雨の後に気温が上昇すると初発しやすく、その後も多湿条件が続くと多発する。
- (2) 予察ほでの初発期は、長沼町では6月17日（平年：6月18日）、訓子府町では6月22日（平年：6月20日）と平年並である。

- (3) 長沼町の予察ほどは平年よりもやや多い発生が認められている。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発期の防除が重要であるため、防除開始時期を逸しないように注意する。
- (2) 本病の発生が認められたほ場では、できるだけ速やかに薬剤散布を開始する。
- (3) 発生対応型防除法を活用し、効率的な薬剤散布を実施する。

軟腐病 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は多雨と日照不足により発生が多くなる。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統薬剤を連用しない。また、オキシロニック酸剤の低感受性菌が出現しているので注意する。

ネギアザミウマ 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温乾燥条件を好み、降雨によって増殖が抑制される。
- (2) 予察ほにおける成虫の初発期は、長沼町で5月6半旬（平年：6月2半旬）と平年より早く、訓子府町で6月1半旬（平年：6月2半旬）と平年よりやや早かった。幼虫の初発期は長沼町で6月4半旬（平年：6月3半旬）と平年よりやや遅く、訓子府町で6月3半旬（平年：6月4半旬）と平年よりやや早かった。
- (3) 予察ほにおける寄生株率および幼虫密度は、長沼町では平年よりやや低く、訓子府町では平年より高い。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 茎葉散布は大多数の株の中心葉に軽微な食害跡が認められてから開始する。
- (2) 近年、道内の広い範囲においてピレスロイド剤に対する抵抗性系統が確認されているため、以下に示す防除体系で対応する。
 - ① 1回目の散布には、効果の高い薬剤（プロチオホス乳剤、スピネトラム水和剤F（2,500倍））を使用する。
 - ② 同一系統薬剤を連用しない。
 - ③ 散布回数が増える場合は、効果の高い薬剤の多用を避けるため、被害抑制効果の期待できる薬剤（アセフェート水和剤、イミダクロプリド水和剤DF、スピネトラム水和剤F（5,000倍）、チオシラム水和剤DF）も使用可能であるが、本種の密度が急激に上昇する条件下では使用を避ける。

ネギハモグリバエのこれまでの発生状況と今後の対策

平成25、26年に、道央地帯を中心に多発したネギハモグリバエによるたまねぎのりん茎被害が問題となりました。本種は、本年も同地帯において5月下旬から成虫の発生が認められ、幼虫による葉への寄生は6月上旬頃から見られています。発生地での黄色粘着トラップによる調査において、5月5半旬～6月4半旬に捕獲された成虫の合計頭数は、実施6カ所で0～10頭（前年実施3カ所での合計頭数14～70頭）と、前年と比較して少なく推移しています。幼虫による被害の程度も前年と比較して軽微です。

過去2カ年の発生経過から、次世代成虫は7月上旬頃から発生し、以降ほ場内の密度が上昇することが予想されます。前年も、6月中の1回目成虫から7月の次世代にかけて、顕著な密度上昇が観察されているので、今後も注意が必要です。

幼虫のりん茎への食入は7月以降に生じるものと思われることから、今後もほ場観察を励行し、直線上にほぼ等間隔に並ぶ特徴的な成虫食痕が葉に認められたら、速やかに防除を開始しましょう。

幼虫食痕、成虫食痕の写真を、北海道病害虫防除所ホームページの「発生にかんがみ注意すべき病害虫 特に注意を要する病害虫」に掲載しています。
(URL <http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/chui/27chui.htm>)

H. あぶらな科野菜

軟腐病 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 多窒素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) だいこんでは、播種 25～30 日後に 1 回目の薬剤散布を実施する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。
- (5) 銅水和剤散布時には薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤を添加する。ただし、収穫間際には汚れを生じる場合があるので留意する。

モンシロチョウ 発生期：既発（やや遅） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 長沼町の予察ほのキャベツにおける産卵初発は平年よりやや遅かった。幼虫の発生量は、長沼町では平年より少なく、北斗市では平年並である。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛翔が目立ち産卵が多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのフェロモントラップにおける誘殺数は、北斗市ではやや多く、芽室町では平年並、長沼町および訓子府町では平年よりやや少ない。
- (2) 予察ほのキャベツにおける幼虫の寄生頭数は、長沼町では平年より少なく、北斗市では多い。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 本種は薬剤抵抗性が発達しているので、防除ガイドに準拠しローテーション散布を実施する。なお、薬剤散布後に効果の確認を行い、効果が劣る場合は直ちに他系統の薬剤に切り替える。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除に努める。

ヨトウガ（第1回） 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

てんさいのヨトウガの項を参照。

I. りんご

黒星病 発生期：既発（やや早） 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温 15～20℃で降雨が多い場合に多発する。
- (2) 予察園での発生は、長沼町の「昂林」では6月15日（平年：6月20日）、「つがる」では6月16日（平年：6月20日）と平年よりやや早かった。余市町の予察園（慣行防除あり）では未発生である。発生量は長沼町の「昂林」、「つがる」ともに平年よりやや多い。

- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。

斑点落葉病 発生期：並 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は夏期の高湿多湿条件で多発しやすい。
- (2) 予察園での発生は長沼町（無防除）の「玉林」および余市町の予察園（慣行防除あり）ともに未発生である。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期および発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。

ハマキムシ類 発生期：既発（やや早） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園におけるリンゴモンハマキのフェロモントラップ誘殺開始期は、長沼町（無防除）で6月15日（平年：6月16日）と平年並だった。慣行防除を実施している余市町Aでは6月3日（平年：6月15日）と早く、同Bでは6月12日（平年：6月17日）と平年よりやや早かった。リンゴコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺開始期は、長沼町で6月5日（平年：6月18日）と平年より早かった。余市町では誘殺は認められていない。
- (2) 予察園におけるフェロモントラップによる誘殺数は、リンゴコカクモンハマキは長沼町では平年より多かった。リンゴモンハマキの誘殺数は、長沼町、余市町ともに平年並であった。
- (3) 予察園における落花直後の被害花叢率は、長沼町、余市町ともに平年並であった。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

モモシンクイガ 発生期：やや早 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般園における前年の発生量は平年よりやや多かったことから、越冬密度は平年よりやや高いと推測される。
- (2) 予察園のフェロモントラップによる誘殺開始期は、長沼町（無防除）で6月15日（平年：6月19日）、慣行防除を実施している余市町Bでは6月15日（平年：6月20日）とやや早かった。余市町Aでは6月15日（平年：6月21日）と平年より早かった。長沼町において、誘殺数は平年よりも多く推移している。
- (3) りんごの生育は平年よりも早く推移している。
- (4) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、産卵開始期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ハダニ類 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 長沼町（無防除）および余市町（慣行防除あり）の予察園では、リンゴハダニ、ナミハダニともに発生は認められていない。
- (2) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達が認められているので、防除ガイドに準拠し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

キンモンホソガ 発生期：並 発生量：少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおいて第1回成虫の誘殺は、長沼町（無防除）および余市町（慣行防除あり）ともに認められていない。
- (2) 予察園における幼虫被害は、長沼町および余市町ともに認められていない。
- (3) 7月の気温および降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、幼虫被害の発生期は平年並、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。

6月15日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理、環境への影響に配慮した農薬の使用等を推進するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、**「農薬危害防止運動」**を実施します。

■ 農薬使用に関する注意事項

- 農薬は、農薬取締法に定められた事項が表示されたもの、または特定農薬に該当するものを選び、有効期限内に使い切れる量を購入する。
- 農薬のラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を読んで、十分理解し、表示された濃度や使用量等を守り、必要量以上に農薬を調製しない。
- 散布作業前日は、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。体調の優れない、または著しく疲労しているときは、散布作業に従事しない。
- 農薬の使用前には、防除器具等を点検し、十分に洗浄がなされているか確認すること。また、農薬の使用後には、防除器具の薬液タンク、ホース、噴頭、ノズル等農薬残留の可能性がある箇所に注意して、洗浄を十分に行うこと。
- 農薬を散布するときは、必要に応じ、あらかじめ、周辺住民等の関係者に連絡し、立札を立てるなど、関係のない者が作業現場に近づかないよう配慮する。
特に、有人ヘリや無人ヘリで防除する場合は、学校や病院等の公共施設及び近隣の住民等に対し、実施予定日時、区域、薬剤等についての周知に努める。
- 農薬の飛散による危被害を防止するため、近隣の住民、飼育されている家畜及び河川等の周辺環境への影響に注意する。
特に、有人ヘリや無人ヘリで薬剤散布する場合は、有機農産物が生産されているほ場等に農薬が飛散しないよう注意する。
- 農薬の調製及び散布作業中は、マスク、手袋、眼鏡等を着用し、体を防護する。
- 散布作業後は、よくうがいをし、手や顔などの露出部だけでなく入浴し全身を十分洗う。



■ 農薬に関してお問い合わせは

道庁農政部生産振興局技術普及課 (TEL:011-231-4111(内線)27-838)

北海道病害虫防除所 (TEL0123-89-2080)

または最寄りの総合振興局・振興局農務課にご照会ください。

登録情報や農薬取締法等について、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」(<http://www.maff.go.jp/nouyaku/>)をご覧ください。

付記

北海道地方 3か月予報
(7月から9月までの天候見通し)

平成 27 年 6 月 24 日
札幌管区气象台 発表

<予想される向こう3か月の天候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

7月 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、平年と同様に曇りの日が多いでしょう。

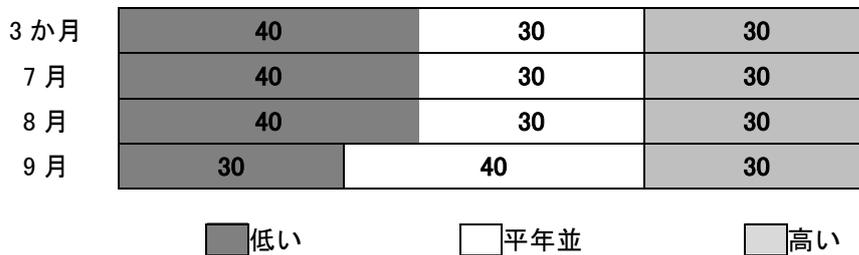
8月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>

[北海道地方]



<<降水量>>

[北海道地方]

